

「選」 ～連句往来～

高校同期の三人による連句は、付け句の呼吸もよく合う。

- ⑳ 重ねても恋はいつでも初舞台 春芳
㉑ 座長芝居で巡るみちのく 周天
㉒ カッパ淵口上聞けば顔出すか 茄言

㉑句は恋句。梅沢富美男が歌った「夢芝居」を下敷きにしている。和歌からの「本歌取り」あるいは物語の場面からとった「本説取り」をした作句も時折見られるが、流行歌の語句を借りた句も面白い。

それを受けた㉑句は、旅芸人一座の東北巡業、いわゆる「どさ回り」を詠んだ。父親が座長を務めていたが、息子が花形役者に成長して新たな座長となって一座を引き連れていく様子が、「座長芝居で巡る」という言い回しに暗示されている。

みちのくといえば、と転じたのが㉒句。柳田国男が収集した民話で名高い遠野の「カッパ淵」を取りあげて、軽妙な口調にした。

そこで次の詠み手である春芳は、やはり民話から題材を取ろうと思った。里の神、山の神、神女、天狗と、『遠野物語』は材料に事欠かない。だが、次の句が詠みやすいようなきっかけとなる要素も入れ込んでおくのが礼儀というもので、

- ㉓ 座敷童子が住まう古民家 春芳

と詠んだ。ザシキワラシはオシラサマと並んで名高い「家の神」である。

周天は、付けやすい句を渡してくれた春芳の心遣いを感じた。そして、「古民家」という語から、すぐに「カフェ」というイメージに行き着いた。

そうだ、ここで月を詠もう。古民家カフェの深い軒庇から見える月が思い浮かんだ。

「二花三月」といって、歌仙三十六句のうちには、花を詠むべき句番二箇所と、月を詠むべき句番三箇所が「定座」として決められている。三箇所目の月の定座は第二十九句に置くのが通常だが、「月は出るにまかせよ、花は咲くにまかせよ」と言われていて、前に「引き上げる」あるいは後ろに「こぼす」こともできる。

また、月は一つの歌仙で三箇所も詠むので、同一の季節、同一の趣向は避けたい。

ここに至るまでの月の定座二箇所は、

- ㉔ 明かり消し月の光で弾くピアノ 春芳
㉕ 冬の月赤提灯の背を照らす 茄言

と詠まれてきた。

「おぼろ月」、「涼月」、「凍て月」とかの修飾語が付けば、それぞれ春月、夏月、冬月であることが明示されるが、月を修飾する語句が付かない場合は、月は秋のものとして鑑賞される。

したがって㉔句は秋月、㉕句は冬月ということになるが、どちらも地上を照らす月なので、ここでは、違う趣向の月を配さなければならない。そこで周天は、

- ㉖ リノベしたカフェの窓から月を観て 周天

と、秋の月を詠んだ。古民家カフェの窓から仰ぎ見る月として、リノベーションという要素を盛り込み、次句を付けやすくしたのだった。

だが茄言は、リノベといった昨今のブームにこだわることなく、古民家に入り込む冷気を詠んだ。

- ㉗ 夜寒わずかに忍び入る時 茄言

連句では春と秋の風情が尊ばれて、それぞれ三句以上続けなければならない。趣きのある季節をたっぷりと味わえ、という古くからの教えなのだろう。「夜寒」は、深まる秋の季語だ。

リノベしても、古民家の家はどこか夜寒を感じさせる。茄言はこの句に、老年を迎えつつある連句仲間三人のことも匂わせようとしたのである。どんなに若くふるまっても、老いは平等にかつ残酷に忍び寄ってくる。

春芳もそうした茄言の含意に気づいた。しかし、「飛ばしの春芳」と呼ばれているだけに、そうした負の側面にはあえて応えないようにした。

②9 ひとひらの紅葉挟んで書を閉じる

春芳

無類の読書家である春芳は、紅葉ひとひらを葉の代わりとしてさりげなく本に挟むという日常の一コマをスケッチした。元は文学青年であるだけに、気取ったポーズも似つかわしい。

連句は前後の句をつなげてみると、まとまった一首の短歌としても味わえる。これを「二句一意体」と呼ぶが、②8句と②9句をつなげると、

「ひとひらの紅葉挟んで書を閉じる 夜寒わずかに忍び入る時」という短歌になるのだ。

次句の詠み手の周天は、茄言が②8句に内包させた「古い」という主題を汲みとって、

③0 よわい 齢重ねて変わる解釈

周天

と付けた。

②8句がもしも「古い」を前面に打ち出した句であったならば、一句を挟んで再び「齢」を詠んだ周天の句は、付け句の流れを後戻りさせる「輪廻」の弊を冒したことになる。連句は停滞を嫌って変化を求める。元に戻ってしまうことは厳禁なのである。

だが、②8句で詠まれたのは、文字の上では忍び入る夜寒。一句挟んだこの場で「齢」を詠んでも「輪廻」には当たらない。

前句②9の「書を閉じる」という言葉をふまえて、周天は読書的话题に転じたのだった。

小説は、読む側の経験の深さが反映されるので、年代によって解釈が変わってくる。だから再読には意味がある。例えば漱石の『吾輩は猫である』も、若い年代にはユーモラスな人間観察が印象に残るだろうが、中年以降になると、世間の息苦しさや人生の苦味ばかりが強くなり感ぜられてくるものである。

さらに言えば、解釈が変わるのは何も読書に限ったことではない。これまで経てきたさまざまな出来事も、しだいにその意味合いが変化してくる。何気なく聞いた言葉の重大さに、あとで気づいてはっとさせられることも起こる。

③1 比べては評価できない選択肢

茄言

あの時に自分はこうしてしまったが、別の選択肢もあったのだろう、むしろそちらに進んでおけば良かった、と思うのが人間の常である。「後悔先に立たず」、「後の祭り」という諺は廃れることがない。

しかし、別の選択肢を選んだほうが良かったとはどんな場合にも言えない、としたのが茄言の句だった。

他人と自分とを比べても意味がない。同様に、後の自分の判断基準を過去の選択に当てはめても仕方がない。人間というものは、その時その時のより良い選択を突き進むしかないのである。ベストなどありえない、その時その時のベターを選んで生きるのである。

この連句仲間三人は、同じ時代の空気を吸った高校の同期生である。一九七〇年が青春前期の真っ只中だった。実存主義哲学が世界の潮流から後退していった時代ではあったが、北関東の片田舎の高校では、未だ熱く語られていた。

自分自身を形成すると同時に世界に意味を与える自由で根源的な選択を瞬間瞬間に行なっていくのが人生だが、その行く先は決まっておらず、いわば人生という無益な受難を自覚的に生きるしかない、という考え方に三人とも染まっていた。③句の「選択肢」という言葉には、三人とも強い愛着があったのである。

しかし、その思想的な重苦しきから抜け出す句にしたい、と春芳は思った。そこで、

③② サイコロ振って道を見極め

春芳

と詠んだ。句の下七「道を見極め」には「極道」という隠し文字を仕込んだ。

自由という刑に処せられている？いや、極道は凶状持ちのお尋ね者、足の向くまま気のおくまを生きるのさ、といった句意だ。「サルトルから国定忠治へ」と春芳は心の中でうそぶいた。

そのような流れならお手のもの、と周天は次の一句を投じた。

③③ 任侠に憧れされど生真面目に

周天

三人とも、ヤクザな内面を気取りながら、存外真面目に仕事を全うして今を迎えているのだった。